

優秀賞

『死ぬことは生きること』

香川大学教育学部附属高松中学校二年 白井 結

この夏、私の祖父が亡くなった。それは突然のことだった。私が朝起きると母の姿がなく、早朝の病院からの電話で、母は急いで病院に向かったと父から聞かされた。祖父の心臓はもう動いていないらしいということも合わせて聞き、一気に胸が締めつけられる思いがした。私はざわつく心を落ち着けようとしながら、どうか祖父の心臓がもう一度動きますようにと祈った。しばらくすると、母が帰ってきた。

「ブージーが亡くなったよ。」
母はそう言うと、呆然としている私達に、一緒に病院に行くよと早口で促した。母は泣いてはいなかった。
病院に着いて、ドキドキしながら祖父のいる処置室へと入った。そこには

つんと置かれているベッドの上に、祖父は静かに横たわっていた。それはまるで眠っているかのようだった。

「触ってあげて。」
母にそう言われ、私は祖父の頬に触れた。冷んやりとしていて硬かった。その瞬間、これまでの思い出が頭を過り涙が溢れてきた。

「お父さん、楽になったね。よく頑張ったね。」母はそう言いながら泣いていた。

私は少し驚いた。母は、とても悲しいというより、ほっとした表情をしていたからだ。

思い返してみると、祖父は長らく患っていた。いくつかの病気が重なり、ここ数年は、施設と病院とを行き来す

ることも多かった。若年性認知症も患らい、家族のことも記憶になくなってしまっていた。さらには、食べることもできなくなり、胃ろうといわれる方法でお腹に開けた穴から栄養を取り、寝たきりになっていた。ここ数年、コロナ禍で会うことがままならなかったため、あまり感じていなかったが、それは相当過酷な状態であっただろうことを、やせ細った祖父を目の当たりにして思い知ったのだ。母はその状態をもっと早い段階で痛感していたのだろう。だからほっとした表情をしたに違いない。私は、こんなことをおそろく数秒の間で考えていた。私にとつて身近な人の死は初めてだった。あまりに衝撃的で、心が空っぽになった気がした。この日の空は、入道雲が天高くまでそびえ立ち、清々しいほどに青く晴れていた。その光景とその時の気持ちだが、不思議とかけ離れているようには感じなかった。

祖父の死を通して、私は「生きるこ

とと死ぬこと」を初めて自分なりに考えてみる事となった。そこでいくつかの本を手を取った。瀬戸内寂聴さんの本だ。昨年、九十九歳で亡くなるまで、尼僧、小説家として活躍されていた方で、私は彼女の本を一度読んでみたいと思っていた。そこには数々の心に残る言葉が書かれていた。

「生きるということは、死ぬ日まで自分の可能性をあきらめず、与えられた才能や日々の仕事に努力しつづけることです。」

「たくさん経験をしてたくさん苦しんだほうが、死ぬとき、ああよく生きたいと思えるでしょう。逃げていたんじゃないあ、貧相な人生しか送れませんわね。」

これらの言葉は、私の空っぽの心に素直に響いた。母が祖父に対してかけた言葉は、まさにこの寂聴さんの言葉の通りだと思った。祖父は、自分に課せられた試練や使命に対して、懸命に向き合ったと思う。『生きること』をあきらめずに最後まで頑張ってくれた。祖父は、たくさん苦しんだと思う。だ

からこそ、よく生きてくれたと思った。祖父の『死ぬこと』を通して、私は『生きること』を教えてもらったような気がした。

祖父は、生前は獣医師として働いていた。我が家のペットの猫は何度も祖父に治療してもらい今も元気に過ごしている。きつと数え切れないほどの動物の命を救ってきただろう。祖父は病気になるってからは、大好きな獣医師の仕事も辞めざるを得なくなり、きつと悔しく、寂しい思いをしていたと思う。今頃、祖父は、再び自由の利く体を手に入れて、伸び伸びと思う存分に好きなことができるようになっていのかかもしれない。そう思うと、心がすつと軽くなったような気がした。そして、祖父は、きつと天国から私達のことを見守ってくれていると感じている。

私はまだ十三歳だ。これから先、まだまだ長い人生がおそらくあるだろう。苦しいことや辛いこともあるかもしれない。でも、祖父が教えてくれた『生きること』を大切に、精一杯努力していききたいと心から思った。そして、私

の頑張る姿を天国の祖父に見てほしい。そう思っている。

この作文を書き終えようとしている今、再び空を見上げてみた。そこには、あの日と同じようにそびえ立つ入道雲と、青く澄み切った夏空が、めいっぱいに広がっていた。